

2020 年 9 月 27 日（日）「抑圧の原理を超えて」

《聖書協会共同訳》コヘレトの言葉 5:7-8

- 7 この州で貧しい者が虐げられ、公正と正義が踏みにじられるのを見ても、驚くな。位の高い役人が見張り、その上にはさらに高い位の者たちがいるのだから。
- 8 何よりも国の益となるのは、王自らが農地で働くことである。

《新改訳 2017》伝道者の書 5:8-9

- 8 ある州で、貧しい者が虐げられ、権利と正義が踏みにじられているのを見ても、そのことに驚いてはならない。その上役には、それを見張るもう一人の上役がいて、彼らよりもっと身分が高い者たちもいるからだ。
- 9 国にとっての何にもまさる利益は、農地が耕されるようにする王がいることである。

【序論】

私は先日、久しぶりに恩師と電話で話したのですが、その方がこのようにおっしゃっていたのが心に残りました。「聖書では『いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。すべてのことについて感謝しなさい』（I テサロニケ 5:16-18）と言われているけれど、この中で一番難しく感じるのは『いつも喜んでいる』ことだ」と。私はその先生が本当にすべてのことを感謝して生きておられることを知っていますし、私のためにも毎日曜日に必ず祈ってくださっているのですが、この世界に満ちる痛み、苦しみ、悲しみの現実を見ると、「喜ぶ」ことができなくなると言っておられました。聖書の教えの通りに生きようとしておられるからこそ感じられる葛藤なのだと思います。私たちが日頃ニュースで目にする事故、争い、暴力、自然災害、貧困、病……いわゆる「苦」と呼ばれるものは、この世に対する希望を損なわせるかもしれません。信仰を持って生きることには何の意味があるのか、今日も御言葉を通して考えていきたいと思っています。

【本論】

前回まで、3回に亘って「礼拝の心得」（神との交わり）について学んできました。ここから本書は新しい単元に入ってまいります、大きな括りとしては 5:7-6:12 の範囲で「貧困と富」の問題が扱われます。このテーマを軸として、以下の内容を学ぶ予定です（いずれも暫定的なタイトル）。「抑圧の原理を超えて」（5:7-8）、「富に伴うリスク」（5:9-11）、「一時的な所有物」（5:12-16）、「富を用いる賜物」（5:17-19）、「賜物を用いる賜物」（6:1-6）、「魂を満たすもの」（6:7-9）、「出口は何処に」（6:10-12）。

本論 1. 抑圧の社会原理

この州で貧しい者が虐げられ、公正と正義が踏みにじられるのを見ても、驚くな。位の高い役人が見張り、その上にはさらに高い位の者たちがいるのだから。(5:7)

ここでは再び「社会的抑圧」のテーマが取り上げられています。3:16、4:1-3 でも既に学びましたが、このように何度も出てくるということは、コヘレトが不公平な社会に対して強い問題意識を持っていたことが窺えます。コヘレト自身がどのような社会的身分にあったのかということも考えさせられます。政治に携わっているからこそ見えているものなのか、社会の底辺が見えるような位置にいたのか。

7節の最初のフレーズで特徴となっている「驚くな」という言葉は、そのような社会的罪を見聞きしたとしても今更驚き怪しむな、ということを読者に勧告しています。なぜなら、それこそが罪人の形成する社会だからです。自らの利益を第一に考える人間によって形づくられる社会には、全き公平などあり得ないということでしょう。

7節の後半では、階層的に連続している権威の構造が呈示されます。ある小さな社会では、その社会の中で力を持つ者が自分よりも下位にある者から搾取するということが起きている。しかし、その小さな社会でトップにある者も、更に大きな社会では搾取される身分である。このような関係が鎖のようにつながっており、そのトップの座に王がいるというのです。しかし、一国の王でさえ、それが帝国の属州であるならば、帝国によって搾取されている身分であるかもしれません。そのような社会システムの中では、自分の立場を守るために金が利用されることが多く、それによって真実が曲げられ、「公正と正義が踏みにじられる」ということが起きるのです。その中で誰が一番苦しい目に遭っているかといえ、それは底辺にいる人々だとコヘレトは言います。

本論 2. 階層的権威構造

「階層的権威構造」は、日本にも存在しました。「士農工商」という概念が日本に取り入れられたのは奈良時代だそうです。この言葉の由来は中国の春秋戦国時代にあり、「士」とは都市国家社会の支配階層である族長・貴族階層を指し（それは時代の推移とともに、国家統治に関わる知識人や官吏などを指すようになった）、その他の「農業」「工業」「商業」の各職業を並べて「民全体」を意味する四字熟語となったそうです。

日本に「士農工商」の概念が取り入れられてから、「士」は「武士」を表す言葉となりましたが、元々「士」と「農」の区別は曖昧なものでした。戦国時代後期に行なわれた「刀狩」によって、武士と百姓は分離され、江戸時代には更に「兵農分離政策」は強

化されました。「士」は支配者層として他の三民よりも上位に置かれ、政治を行なう階級とされました。この身分の者には「苗字帯刀」（武士とその支配側の役人や関係者の身分標識）や「切捨御免」（武士が耐え難い無礼を受けた際には斬っても処罰されないという法律）などの特権が認められました。江戸時代中期には、貨幣経済や産業の発達により商人が力を持つようになり、中には武士並の待遇を得る者も出てきました。江戸時代の身分体系は、大きく「武士」「平人」「賤民」と区分されるようになりました。「平人」の中には「百姓」「町人」がおり、百姓は過酷な年貢に喘いだと言われます。しかし、「平人」にも及ばぬ「賤民」は「えた」「ひにん」などとも呼ばれ、人間としてさえ認められず、人間づきあいからも排除されていました。

封建的社会制度の象徴となってきた「士農工商」の概念は、明治期になると近代国家への脱皮を目指して排除され、「四民平等」が謳われるようになりました。「士農工商」は日本における階層社会の負の遺産と言えますが、世界のある地域には今も尚「カースト」と呼ばれる制度が存在し、生まれながらの身分が決定づけられてしまっている人々がいます。インドの政治家として殉職したプーラン・デヴィは、低いカーストの下に生まれたため凄まじい差別と迫害に遭いましたが、一個の人間としての尊厳を獲得するために社会と戦った女性です。

差別的階層社会というものが神の人間創造の目的とはかけ離れていることは、創世記の記事を読めばよく分かるでしょう。神は人間一人ひとりを「神のかたち」として創造し、男女の間に対等の人格的交わりをお与えになったのです。

神は人を自分のかたちに創造された。神のかたちにこれを創造し、男と女に創造された。
(創世記 1:27)

本論 3. 人間本来の「地を耕す」責任へ

何よりも国の益となるのは、王自らが農地で働くことである。(5:8)

本節は翻訳が最も難しい箇所の一つと言われます。実際、いくつかの訳を比較してみると、解釈がばらばらであることが分かるでしょう。

- ・ しかし、要するに耕作した田畑をもつ国には王は利益である。(口語訳)
- ・ 何にもまして、国の利益は農地を耕させる王である。(新改訳第三版)
- ・ 国にとっての何にもまさる利益は、農地が耕されるようにする王がいることである。(新改訳 2017)
- ・ 土地はすべての人に利益を与える。王でさえ、農耕からの貢ぎ物を受ける。(フランシスコ会訳)

どうしてここまで翻訳の違いが出てきてしまうかを、原文に基づいて整理しておきましょう。

- ①「בָּכָל／バックール」をどう訳すか。基本的には「すべての中で」だが、「すべてに対して」「全体的に」「すべての上に」「結局のところ」「いつも」「すべてにまさって」などとも訳せる。
- ②「נֶעֱבָד／ネエバード」(仕えられる)はどの単語にかかるか。「王に?」「国に?」。あるいは、形容詞的に捉え「仕えられた～」「耕された～」とも読める。
- ③「וְיִתְרוֹ／(ヴェ) イスローン」(利益)とは何(誰)にとっての利益なのか。「王にとって?」「土地にとって?」「国民にとって?」

この箇所を理解する鍵は、やはり文脈にあるでしょう。7節では、政府によって抑圧された貧しい人々の苦悩について語られており、そのピラミッドの頂点にいる王が「良い王」としては描かれていない点を見落としてはなりません。王は地から利益を得るために自らの社会的地位を用いる。そして、鎖のように連鎖した階層から吸い取れるだけ吸い取る。つまり、王自身が国民に仕えられることによって利益を得るという解釈になりそうです。そのように取るならば、新改訳の解釈がそれに近いでしょう。

【展開】

いずれにせよこの箇所は、「土地を耕す」という営みが人間にとっての最も基本的な責任であると聖書が語っているところと、関わりがありそうです。コヘレトはここでも反対側からのメッセージを発信しているのであり、この世の抑圧的社会原理が神の目的とは真逆であることに気づかせ、それでいて人間が苦しみながら「土地を耕す」責任を負い続けている現実を目を開かせようとしているのです。

先の「土農工商」の話に戻りますが、江戸時代に「百姓」と呼ばれた生業は、農業だけでなく海運業や手工業なども含まれていました。しかし、幕府は農業の衰退を危惧して、農民が町人のような商売を始めることに制限を設けたりしています。農業の衰退とは、まさしく国の生産力の低下であり、国民の生活の死活問題となってくるのです。上に立つ者はそのことを理解し、農民を敬う必要があります。

コヘレトが暗に理想として描いている社会が見えてまいります。それは、王が自分の利益を追求した社会制度をつくり上げるのではなく、国民全体が、延いては土地そのものも利益を得ることのできる、土地と人間の平和な関係です。聖書協会共同訳の「**何よりも国の益となるのは、王自らが農地で働くことである**」という訳はやや読み込みすぎかも知れませんが、コヘレトの理念をよく読み取っていると思います。

【結論】

現在の世は、土地も人間も搾取され続けている状態と言えるでしょう。必要以上のものが生産され、そのための労働力が求められ、余った分は廃棄されています。その一方において、食糧難で死んでいく人々もいます。このような人間世界に「仕える王」として来られたイエス・キリストを私たちは信じています。

人の子は、仕えられるためではなく仕えるために、また、多くの人の身代金として自分の命を献げるために来たのである。（マルコ 10:45）

キリスト者が生きていくうえでの姿勢が教えられているでしょう。まず、理想とは程遠い世界を見て驚き怪しむことなかれということが言われています。罪人が支配する世である以上、それは避けて通ることができないのです。しかし、その不完全な社会構造を通してさえ、神が万物を支配しておられることも忘れてはならないでしょう。そして、支配者自らが仕えることをゴールとして抱くと同時に、まず自分自身が人に、社会に、土地に仕える者になりたいと思います。主イエスが進んですべての人のしもべとなられたように、私たちもまず身近なところから主に従う生き方を始めていきたいと思います。

【祈り】

すべての人間を平等にお造りになった、天の父なる神様。人間の尊厳は、神の御前に一人として差異がありません。しかし、この世界は「力の原理」に支配されており、強い者はますます強くなり、弱い者は持っているものまでも取り上げられる現実があります。そのような世界に「しもべ」として来てくださった王イエス・キリストを拝します。私たちもこの方に従い、自ら人に仕える者となり、神の国の原理の拡大の一端を担いたく願います。この週も私たちを励まし、日々歩み方を教えてください。

【祝祷】

仰ぎ願わくは、

人を「神のかたち」として造り、仕え合うべき存在となし給うた、父なる神の愛、抑圧の社会原理の只中に、「しもべ」として降り給うた、主イエス・キリストの恵み、神の国の原理に生き、隣人に自ら仕える者とならせ給う、聖霊の親しき交わりが、あなたがた一同の上に、限りなくあらんことを。